

だい かい  
第14回

# 「いつもありがとう」

さくぶん 作文  
にゅうしょう さくひん 入賞作品集

2020

〈選者〉あさのあつこ / 森田正光 / 小島奈津子 / 山崎正毅 / 清田 哲



## シナネンホールディングスグループ のこと知っているかな？

皆さんの身近なところで活躍しています！

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネンホールディングスグループのこと、みなさんはどんな会社か知っていますか？

実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っていたり、社会を支えたりしています。その製品や事業について紹介します。

- オリジナル住宅用品の販売  
洗濯機用防水パンなど
- 太陽光発電システム
- ハウスクリーニング
- ビルメンテナンス
- リフォーム
- LPガス自動車用オートスタンド
- サービスステーション
- 電気
- 家庭用エネルギー  
LPガス・都市ガス
- 自転車
- シェアサイクル
- LPガス・石油卸販売
- バーベキュー (BBQ) 用炭
- 省エネ提案
- システム事業  
LPガス・電気の販売、配送、保安など
- メガソーラー
- 工場・業務用エネルギー
- 木くずリサイクル
- 抗菌剤
- 船舶用燃料

「いつもありがとう」作文コンクール主催企業

### シナネンホールディングスグループ

シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ ミライフ東日本  
日高都市ガス シナネン シナネンサイクル シナネンモビリティPLUS  
シナネンエコワーク シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン  
インデス シナネンファシリティーズ

シナネンホールディングス株式会社

本社：東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階



ありがとう作文

第14回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2020) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

山崎 正毅(シナネンホールディングス株式会社)

清田 哲(朝日小学生新聞)

最優秀賞

「お母さんの左手」

米島 夏綾……………4

シナネン賞

ま法の日記

岩佐 葵……………6

ミライフ賞

ひさしぶりだね、じいじ

高林 周……………8

朝日小学生新聞賞

わが家の山んば様

斧研 伊織……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

ゆつくりないもうと

上村 紳……………12

さいこうのおかあさん

能美にな……………14

おとうさんのテレワーク

杉山 倅彩……………16

〈高学年の部3編〉

そつくりで、正反対な妹へ

最強軍団への感謝

外婆の涙

小柏 奈帆子……………18

小柏 蒼太……………20

陳 語綺……………22

団体賞(9団体)

【福島県】 只見町立只見小学校

【群馬県】 太田市立生品小学校

【千葉県】 松戸市立六実第二小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【兵庫県】 洲本市立安乎小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

【愛媛県】 西条市立神拝小学校

【福岡県】 福岡雙葉小学校

【宮崎県】 延岡市立浦城小学校

主催・シナネンホールディングスグループ

朝日学生新聞社

後援・文部科学省 朝日新聞社

●応募総数九、五四〇作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ(作家)

毎回同じことを言っている気がしますが、やはり言わせてください。手元に届いた作品すべてが最優秀賞です。コロナ禍の中で、子ども達をとりまく状況の厳しさがクローズアップされ、家族の形、親子の形がどれほどゆがんでいるかを報じるニュースが多く流されました。でも、この作文を読んでいるうちに、人が人を思いやり、いっしょに生きていく、ごく普通の人の結びつきを信じられると思えました。文章もすばらしかったです。どの作品もすなおな文章で個性的な、ありがとうがいていねいに書き込まれていました。

森田 正光

「気象予報士」

作文は思い出や出来事を書きつづるだけでなく、その時の気持ちや表すことも大切だと思います。今年も新型コロナウイルスの影響もあつてか、家族や身近な人への「ありがとう」に心から共感できました。また物語性やユーモアのある面白い作品が多く、選考するのが大変でした。来年もたくさん素晴らしい作品に出会えることを楽しみにしています。

小島 奈津子

「フリーアナウンサー」

皆さん、受賞おめでとうございます。例年同様、今年も作品のクオリティが高く、どの作品にも感銘を受け、審査に大変悩みました。テレワークしているお父さんの背中、おじいちゃんのお見舞いもままならず、毎年夏休みに遊びに行っているおばあちゃんの所に行けない…など、コロナウイルスは私

達を苦しめ、不安にさせていますが、何げない普段の生活や一番近くにいる家族をあらためて見つめ直せる機会でもあり、皆さんの「ありがとう」もたくさん、作品に盛り込まれていました。2020年は感謝を深く感じられる特別な年になりましたね。

山崎 正毅

「シナネンホールディングス株式会社」

年々応募者のレベルが上がって行き、描写によりストレートに情景とその時の感情が浮かんでくる作品が多数あり、優秀作品の選定には苦労しています。今年もコロナ禍の中でコロナに関連する作品もあり、新しい生活様式の中で家族への思いや家族の結び付きがより強くなったと感じられる作品がありました。毎年作品を読むと自分の家族への愛情と感謝の気持ちについて反省をさせられると共に、すがすがしい気分させてくれます。

清田 哲

「朝日小学生新聞」

なげない日常生活の中に、たくさんの「ありがとう」がもれていることに、気づかれました。「ありがとう」って、こんなに素敵な言葉だったんですね。なかなか素直に感謝の思いを伝えられない時もあります。でも改めて文字にしてみると、自分の気持ちを整理し、見つめ直す機会にもつながっているようです。不平や不満、怒りも、もしかするとどこかで、「ありがとう」に結びついているのかもしれないですね。

(順不同敬称略)

## 「お母さんの左手」

米島 夏綾

わたしのお父さんは、はたらいしていない。その代わり、そうじやせんたく、ごはんを作る家事をしてくれる。わたしにとって、お父さんがいつも家において、家事をすることは当たり前だけど、スーパーの店員さんや友だちのお母さんたちからはふしぎに思われている。今まで何回お父さんの仕事は何、と聞かれたかおぼえていない。それでもお父さんはいつも笑っている。気がつくともわたしも笑っている。わたしはそんなお父さんが大好きだ。

ある日、めずらしくお父さんが笑ってくれない事があった。その日は、いつもの様にわたしとお父さんと公園に遊びに行った。しばらく遊んでいるとおまわりさんが四人あわてた様子でわたしたちの所へ来た。お父さんがわたしをゆうかいしようとしていると、だれかがつうほうしたらしい。さすがのお父さんもこの時はおちこんだらしく、今夜は飲みたい気分、と言ってコーラを一口だけ飲んでむせていた。お父さんは、お酒もたんさんもきらいで、この時しか飲んでいるすがたを見た事がない。わたしの前ではいつも笑っていて、やさしいお父さん。いやな事があつたらまたコーラ飲んでね。

お父さんが家事をしているのには理由がある。お母さんの左手だ。わたしのお母さんは、生まれた時から左手が思うように動かせない。物を持つ事もつかむ事もごく大へんだ。お母さんがわたしをけがさせない様に、お父さんとお母さんはわたしが生まれてくる

時に、役わりを交代しようと思った。だから、わたしの家ではお父さんが家事を、お母さんがはたらいしている。

お母さんを見ただけで、左手が動かないと分かる人はいないだろう。外見では、わたしの左手と何もかわらない様に見える。だから、左手が動かない事を分かってもらえず、いやな事をされたり、言われる時がある。それでもお母さんもいつも笑っている。いやな事を言う人よりも、手つだつてくれたり、やさしくしてくれる人の方が多いから、お母さんは人に感しゃして笑顔でいる事を大切に行っている、と教えてもらった。

新がたコロナウイルスのせいで、学校に行けなかったり、友だちに会う事もできなかつたけど、お父さんとお母さんがいつもそばにいてくれたからぜんぜんつらくなかつたよ。毎日、おいしいごはんを作ってくれてありがとう。お父さんの作るごはんが、世界で一番おいしいよ。

お母さん、いつも東京まではたらしきに行ってくれてありがとう。あたしもお母さんに負けない様にべん強がんばるね。

そして、お母さんの左手。あなたのおかげで、わたしの家は明るくて毎日楽しいよ。これからも、たくさんお手つだいするからね。ふつうに動かないかもしれないけれど、わたしはあなたが大好きだよ。わたしにとって、あなたはだれよりもすてきな左手だよ。本当に、ありがとう。

## 評価のポイント

構成力が素晴らしい。両親のことがしっかり書けており、読むとシーンが浮かんでくる。

## ま法の日記

岩佐 葵

私の祖母は、時々私の名前を忘れる。父の名前も姉の名前も忘れる時がある。不思議なことに母の名前は忘れたことがない。私の事を覚えていない祖母に会いたくなくて、面会に行かない日が続いている。

祖母は認知症と診断される前から日記を書いていた。母にその日記を見せてもらったことがある。その日にしたこと、感じたことを自由にノートに書いていた。最近記憶が薄れないように、覚えておくことを必死に書いていた。電化製品の使い方、家族の電話番号、看護師さんの名前など、毎日繰り返し書いていた。

父は、母である祖母が記憶をなくしていく状態を悲しんでいた。そして何度も同じことを聞いてくる祖母にいらだっている時もあった。ある日、その日記を見つけて読んだ父は涙を流していた。

「泣いてないで。ちよつと鼻水がただけやで。」

父はそうごまかしていたが、父の気持ちは私にもわかっていった。

日記には、家族への想いもたくさん書いてあった。優しい親孝行な父。おっとりしているけど人一倍優しい姉。いつも熱心に何にでもチャレンジする私。自分(祖母)に似ているからすぐに仲良くなれた母。認知症になり記憶が薄れていく中で、祖母は以前と変わらず私たちを見守っていてくれたのだ。祖母の言葉で私はいつも元気をもらう。今、このしゅん間の記憶がなくなっても、祖母の中には確かに家族への気持ちがあふれていることが分かる日記だった。祖母は今も私たち家族と共に生きているのだ。

次に会う日は私の名前を覚えていてくれるかな。もし忘れていても、もう一度教えればいいんだね。名札を胸にそっと付けて行くのもいいかもしれない。いつも日記で私をほめてくれてありがとう。その言葉に元気をもらっているよ。祖母にそう伝えたくて今すぐ会いたくなった。早く祖母に会いに行きたいな。そう日記に書いて眠った。

## 評価のポイント

祖母の病気について、状況を受け止めつつ前向きに過ごす様子がよく伝わってきた。

## ひさしぶりだね、じいじい

高林 周たかばやし あまね

じいじい、ひさしぶりだね。おほんで、おうちにかえってきたね。きゅうりのうまも、なすのうしもつくるよ。ゆっくりして行ってね。

じいじいとのおもいでは、いっぱいあるよ。わたしが、まだあかちゃんだったころ、よくだっこしてくれたね。いまでもはつきりおほえているよ。おかゆをたべさせてくれたことも、えほんをよんでくれたこともあったね。おにわで、みずあそびもしたし、よるには、はなびもしたよね。とつてもたのしかったね。じいじいとはなびをやったときの、ローソクのあとがいまでもコンクリートにのこっているよ。なつかしいよ。じいじい。

じいじい。ランドセルかってくれてありがとう。とつてもきにいつているよ。いろいろもようもだいすきだよ。小しょうがっこうは、たのしいよ。おともだちもいっぱいできたし、せんせいもちよつぱりこわいけどとつてもおもしろいし、おべんきようは、たまにわかないときもあるけどたのしいよ。じてんしゃもかってくれてありがとう。みずいろでとつてもすてきなじてんしゃだよ。さいきんのれるようになったんだ。じいじいにもみせたかったな。ランドセルもじてんしゃも。

じいじいが、きゅうきゅうしゃにのせられるとき、びっくりしたよ。そして、もしかしたら、もうあえないかもつておもったんだ。でも、ほんとうにそうなっちゃったね。コロナで、おみまいもだめだつてしまったとき、さびしかったよ。あいたかったよ。じいじいやつとあえたのは、つめたくなつてからだだったね。じいじいのおふとんにもぐりこんだらつめたくてかたくなつてたね。でも、やつとあえてうれしかったよ。

じいじい、あしたまでみんなとられるね。ゆっくりして行ってね。かえりは、なすのうしにのつてかえるんだよ。ああたんがいつてた。じゃあね、じいじい。

八月十五日 はちがふごうじゅうごくにち たかばやし あまね

## 評価のポイント

語りかける文章によって「じいじい」への作者の気持ちがよく分かるようになってる。

## わが家の山んば様

斧研 伊織

ぼくの家には山んば様がいらっしゃる。この山んば様、世界最強なのだ。家族全員がインフルエンザにかかっても、山んば様は一人だけ元気。ぼく達のお世話に動き回っていた。強健な体だ。ようち園のとき読んだ絵本の中の山んばは、最後はよもぎの汁で体がくさり、しょうぶの葉で体を切られて死んだけど、うちの山んば様はちがう。毎年正月によもぎもちを食べて年々大きくなり、ビールを飲みながらしょうぶ湯に入って、最高だと言う。しかも、ぼくの心の中が分かるんだ。ぼくの顔を一目見ただけで、学校でいやなことがあったと分かる。うれしいことがあったと分かる。ふしぎだ。

友達とあのことがあったとき、だれにも言えなくて、はずかしくて、苦しくて、心はれつしそうで、思わず山んば様に言ってしまったことがある。するとなぜか次の日には全てのことがかい決していた。山んば様には、ま力があるようなのだ。おそろしい。

このお方の弱点は何だろう。どれだけ考えても分からない。だけど、聞いてみたらかん単に教えてくれた。

ぼくが先に旅立つこと。

それは山んば様の心をにぎりつぶし、山んば様の体にこま切れにするようなみを与えるのだそう。そんなことになったら、あの世で会ったときにグーパンチを百発くらわせてやると言っている。そしてえんま大王のペンチをうばい取って、したをひっこぬいてやるとおどしてきた。このお方なら、えんま大王も負けるかもしれない。本当におそろしい。しかも百二十才まで生きるとせん言っているんだ。そのとき、ぼくは九十才だぞ。だからぼくは好ききらいはしない。魚も野菜も食べる。早ね早起きをして、ゲームだつて週にたったの二回だ。虫菌になったこともないし、ここ数年は病院にも行ってない。毎日かいべんだ。えんま大王にとつぜんつれて行かれないように、毎日ががんばっているんだ。

こうしてよく考えてみると、先に旅立たないって、ぜったいにやくそくすることのできない、とてもむずかしいことなんだ。だけど、いつでも元氣なぼくを見て、毎日山んば様を安心させてあげたいなあと思っている。だって、外でどんなにつらくても苦しいことがあっても、一歩家に入るとなぜかほっとする。うれしいことがあったら、百発幸せな気持ちになる。世界最強の山んば様が、毎日ぼくを守ってくれているからだ。百発グーパンチをくらわないように、一日一日を大切にしていこう。九十才かあ。約束はできないけど、今のところはだじょうぶだ。だからこれからもぼくをよろしく、山んば様。いや、ぼくのお母さん！

## 評価のポイント

日常生活の中にあるたくさんの「ありがとう」に気づかせてくれる作品。

## ゆっくりにないもうと

上村 紳うえむら けん

ぼくは5にんかぞくです。だいすきないもうとがふたりいます。きょうは3さいのいもうとのゆいについておはなしをします。

ゆいはせいちょうがとてもゆっくりです。3さいでもはなしをしたり、あるいたり、じぶんでたべたりすることができません。なので、かぞくでたすけあいながらせいかつをします。

ゆいはからだがよわく、なんかいもにゆういんをしています。にゆういんをするとおかあさんがびょういんへいってしまうので、ぼくといちばんしたのいもうとはすこしさみしいです。でもゆいもがんばっているので、ぼくもがまんできます。

ゆいはわるいことをしてもあまりおこられません。おかあさんはゆいがものをなげてもそのときはおこるけど、あとでおとうさんにじょうずになげることができたとうれしそうにつたえています。ぼくがやったらおこるのにゆいはおこられないでいいなおもいます。

ゆいはぼくがほいくえんにおむかえにいくとすぐうれしそうにてをふります。ぼくがごはんをたべることをおてつだいしてあげるとたくさんたべます。だからゆいはすごくかわいいです。

おはなしができなくてもぼくにはゆいのきもちがわかります。みんながゆいのはなしをしているとうれしそうなかおをするし、おかあさんにおこられるとかないかおをします。ぼくがっこうにいくとおおきいこえでなきます。きっとゆいはみんなのことがだいすきだとおもいます。

いつもニコニコしていて、ゆいがわらっているとかぞくがみんなえがおになります。ゆいのえがおは、もうすこしでつのはえてきそうなくらいおこっているおかあさんのこともえがおにしてくれて、ぼくたちきょうだいをまもってくれるまほうです。

ゆい、いつもありがとう。

これからもたくさんあそぼうね。

## さいこうのおかあさん

能美にな

わたしのおかあさんは、しごとをしています。わたしはがっこうのあと、おばあちゃんので、いえでおかあさんのかえりをまちます。おかあさんの「おかえり」のこえがきけないので、ときどきさみしくなることがあります。

おかあさんとわたしには「つやくそくがあります。それは「おかあさんがみにくるぎょうじはかならず「ばんまえてみる」こと」です。

きよねん、はつびょうかいでげきをすることになりました。わたしは、ずっとやりたかったでんしのやくをすることになりました。やくのはつびょうのときには、とびあがつてなみだがでるほどうれしかったのに、かえりみち、すこしふあんになってきました。てんしはスポットライトをあびて、「一人でうたいます。じつはわたしは、うたががてなのです。おかあさんがかえつてすぐ、てんしになったことをいいました。おかあさんは、「やったね。ぜったい「ばんまえてみるね」と大よろこびしてくれました。わたしはしょうじきにいました。「でも、うたがあるの。一人でうたうからふあんなの。」すると、「じゃあママと「しよにれんしゅうしよう。」と喋ってくれました。そしてせん生にがくふをもらい、まい日、やすみの日も、しごとからかえったあとも「しよにれんしゅうしました。れんしゅうのおかげで、うた

もだんだん上ずらくなってきて、せん生にほめられることができてきました。こころのなかにいたくらいふあんがすっかりきえてしまったように、わたしはうたをうたうのがたのしくなってきました。

いよいよ本ばんです。きえていたとおもったふあんが、またすこしかおをだしました。きんちょうで、のどがギョツとつぶされたようです。きやくせきはまっくらでしたが、ぶたいのひかりでまえのほうのおきやくさんだけはみえました。「ばんまえておかあさんがいます。そしてわたしをみて、大きくうなずきました。それをみるときゅうに力がわいてきました。まるでここにちよくせつスポットライトをあてたようです。そして、れんしゅうしたせいかをきいてほしいというつよいきもちがうまれてきました。むちゅうでうたうとたくさんはくしゅをもらえました。うれしくて、このままてんしのはねでとんでいけそうなきがしました。

かえったら、おかあさんが「いままでで「ばん上ずだったよ」とほめてくれました。そして「しゅえんじょゆうしよう」とかいた、てづくりの金いろのトロフィーをくれました。トロフィーは、うたうときのわたしとおなじポーズをしていました。

まい日の「おかえり」がなくても、大じなときにはいつもいてくれるわたしのおかあさん。きょうもしごとからぶじにかえってきてね。わたしが「さいこうおかあさんしよう」をじゅんびして、「おかえり」っていうよ。



## おとうさんのテレワーク

杉山 倅彩

わたしが夏休み中に、おとうさんは、一しゅう間だけテレワークになった。おとうさんが、いえにいるから、わたしはともうれしかった。

おとうさんが、しごとをしている二かいのへやへ行って、わたしと妹は、ベッドの上であそんだ。とんだり、はねたり、ふとんの中にもぐったりした。

おかあさんにおこられたけど、おとうさんはおこらなかつた。でも、いつもおとうさんは、わたしが、言うことをきかないときは、とってもおこるからこわい。

おとうさんのパソコンには、カメラがついている。パソコンのがめんに、会社の人のかおが見えた。わたしのかおも、パソコンのがめにうつってはおもしろかつた。

どうしても、へやに入ってはいけないときは、かぎをかけられた。けれど、かぎがかかっていないときにあそんでいても、おとうさんはおこらない。パソコンにむかって、じつとしゅう中していた。

わたしは、ふと、きもんになった。おとうさんよりさきに、おひるごはんをたべながら、おかあさんに聞いてみた。

「しごと中におとうさんのへやであそんでいても、どうして、おとうさんは、おこらないのかな。」

「おかあさんも、おとうさんに聞いてみたんだよ。うるさいでしょ。なんでおこらないのかって。」

おかあさんが、そう言っておしえてくれた。

「かぞくが、いえにいることはわかってのことだから、おこらないって。それと、せっかくだから、しごとをしているすがたを見てほしいって。おとうさんのしごとをしているすがたを見て、なにか気づいてくれたらうれしいなあって言っていたよ。」

わたしは、ハッとしました。それから、言われる前にしゅくだいをやることにした。

おとうさんも、しごとをがんばっているから、わたしもべんきょうがんばろう。

妹に、ひらがなをおしえてあげよう。

いつも、かえりがおせいおとうさん。一しゅう間テレワークになってうれしかった。

パソコンにむかって、しゅう中していたおとうさんを思い出して、わたしも、がんばるよ。

おとうさん、いつもかぞくのためにがんばってくれてありがとう。

## そっくりりで、正反対な妹へ

小柏 奈帆子

幼稚園の年中組の夏、妹が生まれた。それまでは、二つ上の兄に引つ張ってもらうばかりだった自分が「お姉ちゃん」になるのがうれしくて、私は真剣に赤ちゃんの名前を考えた。登園の道を歩きながら、頭の中にくつもいくつも候補を浮かべた。女の子とわかっていたから、どうしても自分と同じ「子」の字を付けたいと考えて、仲良し姉妹になるのをイメージした。そうして、ものすごい雷と大雨の夜、兄も私もどきどき待ち構えていたところに、無事に元氣な赤ちゃんが誕生した。

それから、あつという間に五年が過ぎた。妹は、私がお姉ちゃんになった時とちようど同じ年になった。可愛らしい妹と、和やかな姉妹を想像していたはずなのに、今、現実はそのとだいぶ違ってしまったている。五才の妹は、半分は可愛いが、半分は怖い。正直なところ、その強さに圧倒されて、負けてしまう場面がたくさんある。運動が苦手な私とは逆に、小さい頃からとても活発な妹は、走ったり跳んだり登ったり、すいすい出来て立派だけれど、そのパワーが時々私に激しくぶつけられ、ちよつとした口げんかから、手加減なしで攻撃してくるので、たまったものではない。夢見ていたのとは全く別物のような、強力な妹に、全くうんざりしてしまう。

でも、そんな妹の、ふとした一面に、思わず感心させられることがある。私の中には無い粘り強さや、何としてもやり抜こうとする姿に、じつとくぎづけになってしまふことがある。例えば、少し前の梅雨時。蒸し暑い中で、「今日は絶対〇回。」と目標を立てて練習を始めた縄跳びは、毎日それを達成するまで、汗びっしょりに、泣きそうになりながらも頑張り続けた。達成できなければ、翌日すかさず再挑戦し、何が何でも成しとげた。鉄棒も、うんていも、手の平にまめができて、皮がむけてしまつても、「やる!!」と決めたら必ず最後までやり抜いた。その、決してめげない心は、つい自分を甘やかして途中でくじけてしまふ弱い私と比べると、本当にうらやましく、あこがれの気持ちがあふれてくるのだ。

それに、時にきょう暴化しても、実はとても優しい妹は、なまけ者の私や兄をそつちのけに、自分からときばきと洗濯物をたたんだり、手伝い上手だ。私達に頼みごとをする時には、すごく真面目に伝えてきて、そして心の込もった「ありがとう。」をくれる。けれども、私の方からこそ、もつともつと大きなありがとうを伝えたい。五年前、しわくちゃで、真っ赤な顔の小さな赤ちゃんだった妹へ。性格は正反対で、まぶたは二重と一重とで違うのに、なぜか皆に「姉妹そっくり。」と言われる妹へ。私が「りさこ」と名前を決めた妹、里咲子へ。本気で頑張ることの格好よさを教えてくれてありがとう。ここに、こうして、私の妹として生まれてきてくれて、本当にありがとう。

## 最強軍団への感謝

小柏 蒼太

母と、二学年違いの妹、そしてさらにその五つ下の妹。僕は普段、この女系家族の中に、ぼつんと男一人で暮らしている。父はひたすら仕事に忙しく、日々の残業や出張が当たり前だし、ひところは単身赴任をしていたこともあって、残念ながら家族との関わりが薄い。そんな父親不在を穴埋めするように、母が本来の役割と父親の代役との両方を担い、毎日この家のかじ取りをしている。

そのせいで、時に爆発する母の怒りのエネルギーは、段々増大しているように思う。そこに加えて、二人の妹達もどんどん強大化している。上の妹は、まるで小さな母親気取りで、何かとがみがみやかましく、僕に文句ばかりぶつけてくる。そのくせに、自分はシャンプーの匂いをふんぶん振りまいて、かと思えば頭をぼりぼりかきながら、あぐらをかいて新聞を読んでいた。まるで、おばさんか、おじさんみたいな振る舞いだ。もう一人、末の妹の方は、僕が七才も年上であることなど一切お構いなしに、自分と対等の相手だとみなして、けんかを仕掛けてくる。僕に対してはひどく口が悪く、「バカー!!」を連発する。まさしく、テレビ番組に登場する、悪態をつくカラスのようだ。

こんな女子軍団に囲まれて、いつも僕は怒られてばかりいる。毎日あれこれ叱られて、ちよつとした悲劇の主人公みたいに、自分が思えてくることもある。が、しかし、僕はこの家族を嫌いにはなれない。むしろ、どんなに駄目を出され続けても、僕が最も心安らげる場所は、間違いないこの家だから。誰よりも僕を理解して、認めて、守ってくれているのは、まさしく、これもなく、この最強トリオだからだ。

僕は、最高学年になっても、品行方正のかけらもない。夢中になると、つい自分本位の喋りが止まらなくなる。それに貧乏ゆすりのくせはいっこうに抜けず、テーパーの下ではいつも足をゆらし続けている。そんなうつつとういしい僕に、年がら年中カタカタと響いてくる振動をやりすごしながら、根気よくじつくり耳を傾けてくれる存在は、他にそうはいない。口うるさい三人からの言葉の数々は、どれもただの文句や不満ではなくて、僕をよく知った上で、僕が暴走やへまをしないよう導いてくれるものなのだ、と冷静に見返せば気付く。本当にありがたいな、と思う。

これまで、習い事や大会等、僕一人の予定のために、母にはかなり飛び回ってもらった。妹達には、ずいぶん我慢や協力をしてもらった。辛く苦しかった時には、大きな支えになってもらった。皆のおかげで、僕の「今」がある。実は、心の中でずつと感謝していてもはずかしくて直球ではとても伝えられない。でも、僕の中にあるこの気持ち、三人の胸にちゃんと響いてくれるといい。僕からの「ありがとう」が、どうか三人の心に届きますように。

## 外婆の涙

陳語綺

「外婆」とは中国語。日本語でいうと「おばあちゃん」「祖母」という意味です。わたしはいつも祖母のことを「外婆」と呼んでいます。

今日、祖母がまた泣いてしまいました。祖母の在日滞在期間はたった三ヶ月。今日は愛知県にある中部空港から祖母が中国へ帰らなければいけないのです。祖母が泣くと私も涙が出てきました。私はこれまで見てきた祖母の涙が忘れられません。祖母は中国に住んでいますが、私の母は少し持病を持っていて、祖母はそんな私の母を手伝いに日本にこれまでに何度も来ています。毎回空港まで送り、お別れする時、祖母はいつもこっそりめそめそ泣いてしまいます。小さいころはただの泣き虫と思っていましたでしたが、小学生になるとやっと祖母の涙の理由が分かるようになりました。私達とはなれるのが悲しいのだと。

ある日、私の母の手伝いをするために祖母はとてもはりきっていました。そんな祖母は、食洗機にお皿やおはしなどを入れてスタートボタンをおしました。

「ガタガタ」

「ゴトゴト」

「プシュー」

いきなり食洗機からあわがふきだしました。食洗機の中はあわだらけです。びっくりしている祖母の横で私達が見てみるとエラー表示が出ていました。よく見ると、食洗機が故障していることが分かりました。原因は、祖母がまちがえてふつうの液体洗さいを入れてしまったことでした。祖母はここに来てみんなにめいわくをかけてしまったと思いきや泣きながら落ちこんでしまいました。わたしの心はとても苦しくなりました。祖母は日本語が分かりません。やはり日本語が分からないと日本にいても不便な事が多いので、少しずつ祖母に日本語を教えてあげようと思います。私はそんな責任感の強い祖母を尊敬しています。

今は新型コロナウイルスで私がいに行ったり祖母が日本に来たりすることが出来ません。だから最近はたくさん電話をしています。前より中国語が上手になると、

「とてもうまくなったね。上手。」

とほめてくれます。そんな祖母の言葉に、もつとがんばりたいと思うのです。そして私の中国語が上手になれば、もつと祖母に、日本のことを紹介してあげられます。

外婆いつも本当にありがとう。

外婆泣かないでね。

コロナがおさまったらまたすぐに会いに行くよ!!